

厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）

小児ビタミン D 欠乏症の実態把握と発症率の推定

分担研究報告書

タイトル 小児ビタミン D 欠乏症の実態把握発症率の推定

研究分担者 氏名 長崎啓祐 所属施設 新潟大学医歯学総合病院小児科 役職 講師

研究要旨：新潟県における小児ビタミン D 欠乏症の発症率の推定と新潟県における日本人の小児、新生児のビタミン D 状況の調査をおこなった。新潟県における小児ビタミン D 欠乏症の発症率は、少なくとも 3.5 人/100,000・年以上である。新潟県の小児のビタミン D は概ね充足していた。冬期においては、乳児のビタミン D 不足に注意が必要と思われた。

#### A．研究目的

新潟県における小児ビタミン D 欠乏症の実態把握発症率の推定

新潟県における日本人の小児、新生児、妊婦のビタミン D 状況の調査

#### B．研究方法

2013 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日の当院の小児科および整形外科を受診した小児ビタミン D 欠乏症を後方視的に検討した。また当院通院中の健常小児の夏期および冬期の 25-OHD 値を測定した。

倫理面への配慮

当院医学部倫理委員会で承認を得た。小児期ビタミン D 欠乏症患者を研究対象としているため、代諾者が必要な者の研究参加が必要不可欠である。対象者は 16 歳未満であるため、代諾者の同意取得を行った。未成年者本人に十分な説明を行い、できる限りその未成年者からも同意が得られるように努めた。

#### C．研究結果

研究期間における小児ビタミン D 欠乏症の初診患者数は 7 名（1 歳 6 名、2 歳 1 名）で、いずれもビタミン D 欠乏性くる病であった。当院通院中の健常小児 9 名の夏期 25-OHD 値は、20 ng/ml 未満は、1 名のみ（19 ng/ml）であった。冬期 14 名のうち、20 ng/ml 未満は 2 名のみ（13, 13 ng/ml）でいずれも 1 歳未満の乳児であった。2 名とも ALP や intact PTH の上昇はなく、くる病の所見も認めていなかった。

#### D．考察

新潟県では、乳幼児の著明な O 脚の多くは、当院整形外科に紹介される。新潟県の 3 歳以下の人口は 65,000 人であり、新潟県における 3 歳以下の小児ビタミン D 欠乏症の発症率は少なくとも 3.5 人/100,000・年以上であった。また新潟県の小児において、夏期のビタミン D は概ね充足していた。冬期においては、乳児のビタミン D 不足に注意が必要と思われた。

#### E．結論

新潟県における 3 歳以下の小児ビタミン D 欠乏症の発症率は、少なくとも 3.5 人/100,000・年以上である。

#### F．健康危険情報

特記事項なし

#### G．研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし